

筑波大学構内におけるサクラの分布特性

阿部 依子 (地球科学専攻)

- 1. 目的:** サクラはほとんどが自生しない種であり、現在全国各地でみられるサクラの多くは人為的に植樹されたものである。したがって、サクラの分布には植えた人の意識が大きく影響している。本研究では、サクラの分布とその特徴を考察することを目的とする。
- 2. 対象地域:** サクラの開花時期には学生や周辺住民による花見が盛んに行われる筑波大学西地区の平砂宿舎および追越宿舎を対象とする。
- 3. 研究手法:** まず、GPS 端末を用いて分布と幹周、樹高、健康状態、テング巣病の感染の有無をウェイポイントとして記録した。そして、ArcMap を用いてそれを地図化するとともに、平均最近隣距離分析を行って分析した。
- 4. 結果・考察:** 調査で見つかった対象地域内のサクラは440本であり、道路沿いに線状に分布する傾向がある(図1、2)。また、平均最近隣距離分析の結果、平均4.9m間隔で分布し、その分布は集塊的であることがわかった。この線状の集塊的な分布から、桜並木を創出することを目的としてサクラが植えられたことが推測される。次に、サクラの幹周や樹高に注目すると、道路や区画ごとに幹周や樹高がある程度統一されていることがわかる(図1)。これは、植樹時期が同じで、日当たりや土壌などの環境が同じである

ためと考えられる。東側の道路沿いで一部高さが異なるサクラが混在している地域があるが、この周辺にサクラの切り株が見られたことから、状態の悪いサクラを切り倒した場所に新たに植樹し、桜並木を存続させていると考えられる。最後に、サクラの健康状態とテング巣病の感染状態に注目すると、南部の森林の中や北部の日当たりの悪い場所の樹木は健康状態の悪いものが多く、さらに、北部の桜並木ではテング巣病に感染した樹木が多いことがわかる(図2)。図1と比較すると、北部や東部の比較的古くに植樹された樹木は健康状態が悪く、テング巣病に感染していることがわかる。しかし、宿舎中央部の桜並木の健康状態は良く、また、ほとんどがテング巣病に感染していない。これは、枝の剪定などの手入れが行き届いているためである。以上から、サクラは道沿いなどの人に「見られる」場所に集中して植樹され、現在も存続のために手入れや新たな植樹が行われていることがわかった。しかし、北部や東部では健康状態が悪い樹木や罹病樹木がみられることから、今後より細やかな管理が必要となる。北西部や南東部で比較的最近植樹された樹木に関しても、剪定や土壌管理などを行っていく必要がある。

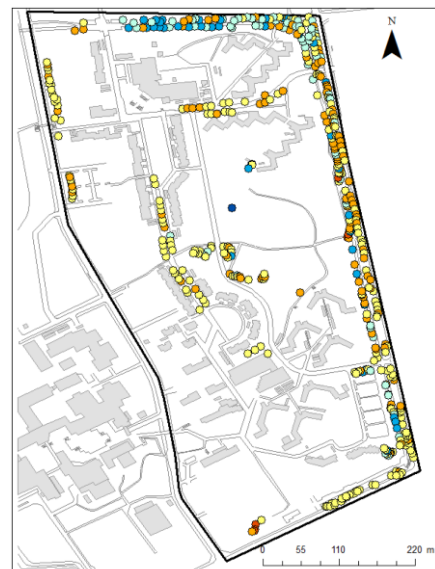


第1図 幹周、樹高別サクラ分布

注1) 幹周は目測で、細(～50cm)、中(50～100cm)、太(100cm～)に分類した。

注2) 樹高は目測で、低(～5m)、中(5～10m)、高(20m～)に分類した。

(現地調査より作成)



第2図 健康状態、テング巣病罹病状態別サクラ分布

注1) 健康状態は目測で、〇(主幹や枝の折れがない・樹形が整っている)、△(主幹は残っているが、若干の枝折れが見られる・樹形が若干崩れている)、×(主幹が折れている・樹形が崩れている)に分類した。

注2) テング巣病罹病状態は目測で、病巣が見られるものを「有」とし、見られなかったものを「無」とした。

(現地調査より作成)